

雲のように



あやた くのん

父と子

ある温泉施設での出来事です。身体を洗って露天風呂に入ると、小学校二、三年生でしょうか、たった一人で少年が湯船に入っていました。何気なく会話が始まりました。

「僕、家族で来たの？」

「はい。お父さんとお母さんの三人で来ました」

「どこから来たの？ 車で？ 混んでなかった？」

「神奈川の相模原からです。東名は混んでいました」

そこで、私はあることに気付きました。少年がタオルを着けたまま湯船に入っていたのです。少し迷ったのですが、少年にこう伝えました。

「僕、湯船の中にタオルは入れないほうがいいよ。みんなが入るのにお湯が汚れるからね」

少年はさっそく素直にタオルを湯船から出しました。しばらくすると父親がドアを開けて入ってきました。そしてタオルを着けたまま湯船に入ったのです。父親と並んで湯に浸かっていた少年は、父親にこう問いかけました。

「お父さん、湯船の中にタオルを入れていてもいいの？」

「別に、かまわないさ」

二人と対面する形で湯船に浸かっていた私は、少年がどうするかを何気なく観察していました。父親の返事を聞いた少年は、一瞬戸惑ったものの、外に出したタオルを再び湯の中に入れようとはしませんでした。

やがて湯から上がり脱衣所で再び、その親子と一緒にになりました。父親が外へ出た後に、冷たい水を飲むために残っていた少年にそっと近づいた私は、こう言ったのです。

「僕、偉かったね」

少年は少しはにかみながらも嬉しそうに出ていきました。

玄関脇のソファで休んでいると、少年が両親に手を引かれて駐車場へ向かって歩いていました。来た時と同じように両親と一緒に楽しく家に戻ったに違いありません。しかし、心の中には来た時とは違う何か芽生えたはずです。今まで知らなかった世界を垣間見たからです。

三十年後、彼自身が親となり自分の子どもを連れて湯船に入る時、彼ならば、きっと私の言葉を思い出してくれるに違いない、と私は信じています。その時、私はもうこの世にはいないでしょうが、一人の少年の心に小さな、しかし新たな光を灯した、この夏の出来事は、私の心の中にも消えることのない大切な思い出を残してくれたのです。

2011年8月

多くの方が、読書を趣味の一つとしてあげます。活字離れが叫ばれる昨今でも、地域の書店に立ち寄ると、いつも多くの人で混雑しています。読書をする、とは現在では本を読むことと同義語なのですが、そんな常識を覆す、ある報告が先日なされました。

アメリカのネット通販大手のアマゾン・ドット・コム社（以下アマゾン社）の発表では、同社が販売する電子書籍端末キンドル向けの販売書籍数が紙の書籍の販売数を上回ったというのです。音楽はCDで買うのではなく、ネットで購入し端末で楽しむ、というスタイルが日常的となったように、アメリカでは、いよいよ書籍にもそうした時代が到来したのです。

こうした電子書籍端末に対し、私自身はこれまで懐疑的でした。百冊近くの古典を収録したCDを購入しパソコンで楽しもうと以前試みたのですが、一日で止めました。パソコンで本を読むというのは、かなりの負担を目に強いるのです。ところがアマゾン社のキンドルを個人輸入して試したところ、それまでの考えが180度変わりました。

キンドルは、いわゆるスマートフォンやタブレットと呼ばれる液晶端末と異なり、特殊な電子インクを用い、書籍と同じ、いや私の印象ではむしろ文庫本などより、ずっと目に負担をかけずに長時間読書をすることが可能です。しかも一台に3,000冊以上も収納できますので、いわば個人で図書館を持ち歩いているようなものです。新書より一回り大きく、241グラムの重さは持ち歩くにも苦になりません。一度充電すれば、二週間以上その必要がありません。携帯電話とは大きな違いです。

残念ながら日本では、アマゾン社は日本語の書籍をネット販売していませんので、手に入る日本語の書籍は、「坊っちゃん」など著作権の切れた古典に限られます。キンドルの画面に最適化されたものがネットから容易に手に入るよう有志の手で整備されています。また自分の書棚に読まれずに眠っていた本を送ると、スキャンしてデジタル化し、キンドルに最適化されたファイルをネット経由で極めて安価に返却するサービスが、現在では利用可能です。書籍は劣化が避けられません。さらに、いったん絶版になると手に入れるのは困難です。大切な本ほど、むしろデジタル化し端末に保存しておいた方が、ずっと安全でもあるのです。

キンドルの使用で電子書籍に対する私の考えは、180度変わりました。これほどの新鮮な驚きを受けたのは、20年近く前に出会ったインターネット電話以来です。時代は今、大きな節目を迎えています。

今年も夏休みを利用してベトナム枯葉剤被害者支援の旅に出かけました。今回は八名と少人数の旅でしたが、新たに三名の方が参加しました。一人は元高校教師で平和運動家、沖縄問題研究家という経歴の持ち主。豊富な経験をユーモアを交えて話される様子は旅の貴重なスパイスでした。残りの二人はオーストラリアから参加された若き女性。日本でいったん職に就きながら現在はアルバイトをしながら現地の学校へ通う毎日。自分が本当にやりたいことは何なのかを探しての旅の途上といったところ。窮屈なアルバイト生活の中、自腹を切って参加される勇気と行動力には頭が下がる思いでした。

クアンガイ省では、今年も九名の方に奨学金を贈呈しました。会のリーダーであるジャーナリスト北村元さんから、奨学生に贈る言葉を依頼されました。原稿用紙二枚にベトナムの若者だけでなく、心の中では日本の若者にも向けて語りかけました。

『本日は皆様に奨学金を贈ることができることを、心から嬉しく思います。このお金で少しでも安心して、みなさんが勉強に打ち込めることを願っています。北村元さんも私も学生時代、奨学金のお陰で勉強に打ち込むことができました。

これからみなさんは一生懸命勉強されるはずですが、でもその前に、一度は次のことを考えてみてください。何のために人は勉強するのか、ということです。もちろん幸せになるためです。では幸せとはなんでしょう。自分が本当に好きなことを見つけ、仕事として毎日それに取り組むことができること、それが幸せなのだ、と私は思うのです。自分が本当に好きな事は何なのかを見つけるために人は勉強するのです。

映画監督の黒澤明は、こう言っています。「自分が本当に好きなものを見つけて下さい。見つかったら、その大切なもののために努力しなさい。君たちは、努力したい何かを持っているはず。きっとそれは、君たちの心のこもった立派な仕事になるでしょう」

人の幸せには四つあります。一つは、人に愛されること。二つめは、人にほめられること。三つめは、人の役に立つこと。四つめは、人から必要とされること。そして人に愛されること以外の三つの幸せは、働くことから得られるのです。

自分が本当に好きなことは何なのか、それを一生続けていくことができるのか。勉強することは自分発見の旅でもあります。幸せへの道は意外と遠回りなのです。時間もかかります。私たちの奨学金が、その旅に少しでもお役に立つことを心から願っています。

健康に注意して、毎日、毎日を大切にすること。その積み重ねが幸せへの道なのです。みなさ

んの頑張っている様子を知らせてください。それは私たちの幸せでもあるのです。ぜひ夢を実現してください。応援しています。』

2010年9月

同苦の心

ベトナム戦争でアメリカが散布した枯葉剤の後遺症に苦しむ人々を支援する活動に夏休みを利用して参加しました。アメリカは1千九百七十五年までに主として南ベトナムに約八千万リットルの枯葉剤を散布し、その中には約四百キログラムのダイオキシンが含まれていました。推定では四百万人以上の被害者が年間の生活費二百米ドル以下で暮らしている、とされています。

今回の旅ではベトナム北部のハノイ近郊のみならず、中部のダナン近郊クアンガイ省の農家も訪問し、各地で眼科検診も行いました。九軒の農家に昨年と同様、自立を支援する目的で子豚を贈り、十四名の子ども達に奨学金を贈呈しました。

訪問した多くの農家では、枯れ葉剤のためと思われる障害を負った子ども達が多く、自分達が死んだ後、誰がこの子の面倒を見てくれるのかと、どの母親も異口同音に不安を述べていました。さらに第三世代にも二十万人近い被害者が出ている、という報告もあります。

ある農家では、十八歳になる娘さんが極度の脊柱湾曲と皮膚腫瘍のために通学もできず家で過ごす毎日。今したいことは、という問いかけに、「本が読みたい」と答えてくれました。障害を負わされ、このような境遇に生きている被害者がどれほどいるのか想像もつかないほどです。戦争の恐ろしさを目の当たりにしました。

帰国後、会の中心メンバーであるジャーナリスト北村元さんの撮影したある写真に目が釘付けになりました。その若者は異様に曲がりくねった体を苦しそうにゴザの上に横たえていました。それまで元気で通学していましたが、十歳頃から歩くことが困難になり、やがて寝たきりの生活から死に至りました。父親が従軍した際に浴びた枯れ葉剤のために兄弟が同じ運命を辿っています。その若者の横顔が私の息子に、とてもよく似ていることに気付いたのです。私は涙をこらえることができませんでした。自分の息子がこんな体になったら、と想像したからです。

この世に涙する者に寄り添い、共に悲しみ、共に苦しみ、共に涙する心が同苦の心だとすれば、この瞬間に私の心の中の同情が同苦に変わったように思います。ただ同情していた自分が被害者に少し寄り添えた気がしました。苦しみの末に亡くなった彼の姿を忘れることなく、これからも活動に関わっていこうと強く決意したのです。

2009年9月

ベトナム支援の旅を終えて

夏休みを利用してベトナムを訪問しました。ベトナム戦争でアメリカが散布した枯葉剤の後遺症に苦しむ人々を支援するためです。沼津、三島に住む人々を中心に十年以上活動している会に家族で初めて同行しました。アメリカは千九百七十五年までに主として南ベトナムに約八千万リットルの枯葉剤を散布し、その中には約四〇〇キログラムのダイオキシンが含まれていたのです。推定では四百万人以上の被害者が年間の生活費二百米ドル以下で暮らしている、と言われていきます。

今回の旅では戦争に参加し被爆した第一世代のみならず、子ども達にも深刻な被害を及ぼしていることを知りました。そうした被害者の家庭を訪問し、様々な支援物資を直接手渡すとともに、自立を支援する目的で今年初めて農家五軒に子豚を贈りました。

ベトナム戦争に参戦した退役軍人らの呼びかけで建てられた支援施設ハノイ友好村では植樹をするとともに、障害を持って生まれてきた子ども達に奨学金を贈りました。また同行した音楽療法士の指導の元、子ども達と共に機能回復のための音楽療法にも取り組みました。さらに私自身は眼科医として、障害を持った子ども達の施設のみならず、農家や学校でも眼科検診を行いました。ベトナムでは未だに、学校ですら医師による検診は行われておらず、一生の間に医師の診察を受けることは、極めて稀とのこと。中枢神経を冒されているためか施設の子供達には強度の眼振が多く、治療の困難なことを伺わせました。

最も印象に残ったのは、十代の二人の少女でした。支援に訪れたある農家には、後遺症から働くことのできない父親と障害を持った四人の子ども達がいました。それぞれが知的障害と視力障害を併せ持ち、働き手である母親を唯一手伝えるのは、視力障害を持つ次女ただ一人。彼女は以前三ヶ月間だけ小学校へ通ったものの、今では家で母親を手伝う毎日。訪問した日、豚小屋のような部屋でワラを燃やし炊事をしていました。診察したところ、補助器具を利用すれば十分教育を受けられるだけの視力と知能を持っていることが分かったものの、家庭状況から通学困難なことは歴然としていました。一方、ハノイ友好村にボランティアとして訪れていたある女子高生は、流暢な英語を操り、来年からは英国に留学し経済学を学ぶ予定とのこと。その瞳は夢と希望に溢れていました。同じ国に生まれ、共に夢を持って生きる権利を持つはずの十代の二人の少女。その境遇のあまりの落差に、私は暗澹たる思いに沈まざるを得ませんでした。

支援の難しさを実感するとともに、全ての子ども達に医療と教育の光の当たる日が、一日も早く訪れることを心から願ったベトナムの旅でした。

2008年8月

人生の四期

インドには四季はないが四期がある、と言われます。必要な知識を得るための「学習期」。家族のために働く「家住期」。ゆったりとした老後を送るために町を離れ、静かな森の中にささやかな住まいを持ち、そこで思索や瞑想の日々を送る「林住期」。そして最後に、夫婦で聖地を巡礼する「遊行期」。インド人の頭の中には、こうした人生の節目が明確に刻まれているようです。

昭和28年生まれの私は、家族のためにまだまだ働かなければならない家住期にあると言えますが、少なくとも心のあり方としては、そろそろ林住期に足を踏み入れるべきなのではないか、と思い始めています。

かつては、人生50年と言われました。自分自身が夏目漱石よりも長生きしていることに、とても不思議な気がします。とはいえ、人は誰も永遠には生きられません。いつかは、旅立つ日がやってくるのです。そうであるなら、人生の節目を明確に意識し、日々の有り様を思い描きながら生きていくことは、充実した一生を送るためには、不可欠のことではないでしょうか。

2年ほど前から体調管理のために始めた早朝ウォーキングが、そうした意味で、これからの生き方に、とてもプラスになっていることに気付きました。毎朝、近くの愛鷹山を歩くのです。一時間半ほどのウォーキングで、最近では体調も良好です。ただ歩くことに精一杯だった頃には気付かなかった四季の変化の発見という望外の収穫は、林住期の成果かもしれません。最近では柿の葉を見るのがとても楽しみです。春になり新しい芽が現れ、それが実に瑞々しい若葉になる。そして秋になると何とも言えない渋い色あいに変化する。もう瑞々しい若葉になれない自分も、努力すれば秋の柿の葉のようにはなれるかもしれない。

俳人と謝蕪村の句に、「茨野や夜はうつくしき虫の声」があります。茨の生い茂った野原が、夜になると虫かごのように美しい虫の音を響かせている、というのです。もちろんこれは単なる草むらを詠んだ句ではありません。昼の茨野は俗世、そして虫の音が響く夜の茨野は蕪村の頭脳の中に作られる美の王国だ、というのです。人は誰しも、日常というしがらみの中で生きざるを得ない。しかし、その中に自分なりの美を、想像力により作り上げることはできるのです。全体を見渡せるだけの余裕を心に持ちつつ、美しきことを発見しながら、幕末の志士、高杉晋作の歌を蕪村風にもじった以下の歌のように、残りの人生を生きてみたいものだ、と私はいま思っているのです。

「美しきことも無き日を美しくすみなすものは心なりけり」

盛人式

先日、埼玉県川口市で数十年ぶりに、竹馬の友と再会しました。その際、彼との間に大変興味深い会話がありました。

友人「今度、セイジンシキに出席するんだ」私「成人式?もう30年も前のことだろ」

友人「そうじゃないんだ。川口では、盛人とは50歳の成熟した盛んなる人をさし、50代の人とその家族を集めて、盛人式を11月に開催しているんだ。論文も募集しているので、応募したよ」

どうやら川口市独自の取り組みのようです。

ところで、50歳と言えば、論語の一節が思い出されます。「五十而知天命」。論語では50代は、「天命、知命の歳と言われていて、これは天が己に与えた使命を悟る年代」とのこと。しかし、私のような小人には「てんめい」を悟るのは、とうてい及びも付かぬ話。江戸っ子の勝海舟なら、ひょっとするとこんな風に読み下したかもしれない、と私などは一人で悦に入っている始末。それは、「50にもなったら、いい加減・てめい・を知れ」。そう、自分自身を知っても良いのが、50代かもしれません。

ある時、大学一年生の息子とカラオケをしていて、初めてある曲を最初から最後まで聴きました。スマップの「世界に一つだけの花」です。200万枚も売れたこのヒット曲を、先日初めて聴いたという浮世離れした自分に驚くと共に、たかだか18歳の息子が悟ったように、「ナンバーワンにならなくてもいい、もともと特別なオンリーワン」などと歌っている様子に、いささか奇異な感じを持ちました。

一人一人が個性を持った一つだけの花であることに、もちろん異論はありません。しかし、自分自身が50歳になってみて思うのは、個性とは、きちんとした基礎の上に花咲くのであって、まだ基礎の基の字も学んでいない息子が、悟ったように口にするようなものではない、ということです。それは、悪戦苦闘、七転八倒の末に獲得するものなのです。

成人式から30年。それぞれがかけがえのない人生を送り、己自身をようやく知った50代の人々こそ、社会人として身に付けた基礎の上に、それぞれが研いてきた個性を、今こそ花咲かせる時ではないでしょうか。

世界に一つだけの花は、成人式ではなく盛人式でこそ歌われる歌だと、私は思うのです。

昨日の空

北朝鮮に帰還したものの生活に困窮して韓国に亡命した元在日朝鮮人の方が、脱北の経緯などについて国会内で証言した、との報道を読みながら、ある映画の一場面を思い出していました。その映画は、「キューポラのある街」。昭和三十七年に封切られ、主演の吉永小百合さんがブルー・リボン賞主演女優賞を史上最年少で受賞しました。鋳物の街、埼玉県川口市を舞台にしたこの映画は、忘れがたい映画の一つです。

その場面は、主人公ジュンと親友ヨシエとの別れのシーン。彼女と父親、弟サンキチの三人が故国である北鮮に帰ることになり、夜の川口駅前に集うチョゴリを着た同胞達が、故国の歌をハングルで歌い出発を祝っているこのシーンを、ご記憶の方も多いと思います。

昭和三〇年代から四〇年代にかけて、幼少年期を川口で過ごした私には、とりわけ思いが深い映画です。当時、市内に点在する数多くの鋳物工場の屋根からは真っ赤な火柱が上がり、夜などそれは美しいものでした。最盛期は昭和三八年頃で、一三〇〇軒もの工場が操業していました。映画の中で描かれていた、従業員が住む長屋風の住宅も、至る所に存在していました。その玄関先を流れる、悪臭を放つ薄汚れたドブのような排水溝の傍らで、子どもたち同士でベーゴマをした記憶が今でも鮮明です。

そんな川口も現在は人口五〇万になろうかという大ベッド・タウン。昨秋、久しぶりにこの街を訪れました。川口を離れてほぼ三〇年。両親も転居し、今では訪れる事もない街の変わり様を、この目で確かめたかったです。

京浜東北線川口駅西口から、当時住んでいた公団住宅跡地までの所要時間は、区画整理が進んだおかげで思いのほか短時間でした。映画で描かれていた面影はもちろん、高校への電車通学に毎日通ったあの当時とも、駅前の様子は全く異なっていました。

川口は荒川の街です。ジュンが通った中学校も、荒川の土手沿いにありました。ジュンが懸命に自転車をこいだあの土手は、中学のクラブ活動で私が懸命に走った土手でもありました。母校の西中学校は、偶然にもその日、体育祭の真っ最中。土手から見下ろすグラウンドの様子は、当時のまま。かつては、自分もあの輪の中において、草に覆われた土手を見上げていたものです。

駅へと向かう帰り道、土手を東へ向かって歩いて行くと、秋の爽やかな青空を背景に荒川を渡る鉄橋が、はるか向こうに見えました。当時と同じく、電車がひっきりなしに往来しています。やがてその光景は、遊び疲れて家路に向かう、当時の私が見た鉄橋へとフラッシュバックしていったのです。

凧（いかのぼり）きのうの空のありどころ

（与謝蕪村）

2002年8月